
私はわたしのために

らく大石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私はわたしのために

【Nコード】

N0028H

【作者名】

らく大石

【あらすじ】

凶器なし証拠なし目撃者なし……動機なし……彼女を無差別殺人へと駆り立てるものとは？果たして本当にヒトなのか？様々な登場人物が正体不明の殺人鬼に挑む！……彼女は……あなたのすぐそばに居るかもしれない……

第一話

こんな夜はあの頃を思い出す

ひたひたと血の滴る生々しい音の中に

毎日が血生臭かったあの頃を

意思を持つ畜生の如くうねる臓器畑のただ中で

幼かった私はそれが当たり前だと思っていた

唯一原形を留めていた頭部をその華奢過ぎると言えるまでの白

い…

ともすれば決して青白くは無い少女の腕が

砕いて

潰した

血をすすり

血で血を洗い

血を流した

…!!?

泣いているの？ わたし…

何故？

コノ男が死んでしまったから？

お気に入りの真っ白なコートが汚れてしまったから？

解らない

幼かったあの時…涙と血の区別もつかなかった私には
どんなとき…どんな理由があつて、ヒトが涙が流すのかを知らな
かった

きっとこれからも解らないままね

知りたいとも思わないけど…

私はこの日

あの頃の衝動にかられ路地裏に住み着いたコノ男を血と肉の塊に変
えた

あの時と同じで殺した後はやはりピクリとも動かなかった

小さな苛立ちをかき消すように

私は歓喜に震えた

…そろそろあの子が起きる時間ね

あの子が起きるなら私は寝なくてはいけない

おやすみ…わたし…

…
深淵に到るまで私は涙を流し続けていた
日はかわり強い雨が地面を突き刺すように降っている午前1時
とあるアパート
とある事務所

一人の男が事件の詳細を見ながら忙しくキーを叩く
（たまに思うんだよな…俺 早打ちの天才だなんて
いやっ…神だな）

…
誰に向けるでもなく自分を褒め称える

確かに彼は有能で警察のお偉い方から直接依頼を受けることもしば
しばだった

（よっしゃ！ペースを上げていくぜっ！！）

タタタタ…

不意にどう…と轟音がなり響く

（何事っ！?!）

続けてブレーカーの落ちる音

消えるディスプレイ

「イイイヤアアアアアっ！…！…！…！」
『うるせええええええええ！…！…！』

「ごめんなさい！…！」

…ちっ鬼ババアめが…

背後でドアが開く

「つんだとてめええええつ…！」

「ぎゃあああああつ…！！！」

…

「グフツ…！」

今…声に出して言うてはなかったよな…俺

鬼の帰りしな

奴はエスパーか！？と考えそうになるがそれを抑えた

…なんとか

心を無にして

「さて…鬼ババアはともかく

再び耳をつんざく様な轟音

「また雷か？」

音はなり止まない

…
鬼ババアの壁を打つ音だった

…バアさん（彼の隣にすむ76歳の元気過ぎる婆さん、名前はまだない

、今年喜寿）

がいると話がすすまねえ…

これも抑える

やつと本題…

「あゝあ晩飯も食わねえでやってたのによ…ったく…
もうやるき出ねえよ

明日警視庁に断りの電話いれるか…」

別にデータが消えたことや、ましてや鬼ババアのせいでは決してない

6

彼が調べていたのは殺人事件

それもバラバラ…と言うかグチャグチャ

被害者は路上に住む48歳独身無職

死亡推定時刻は死体の状態から判断し午前4時前後

凶器もそれらしい痕跡も目撃者もいないらしい

はなから情報が足りないのだ

鑑識課もお手上げのようだ

もちろんそれで彼のところに依頼が来たわけだが…

「無理無理やつてらんね

とりあえず今日は寝る」

深空 圭は明日に備え瞼を閉じた

第二話

大空にいる

海の向こうが見える

鳥…

自分は鳥なのだ

自由に飛び回る

仕事に追われることもない

時間を気にすることもない

何かに縛られる事もない

ふと

目の前に綺麗な白い鳥

鳥…自分はその白に見とれる

その美しい白をを追うように

(いや 意識せず追っていたのだから)
少しだけ速度を上げて後ろを飛ぶ

予想以上に白は早く

追い付こうと加速を増す自分をみるみる突き放していく

その刹那

横から飛んできた大きな黒い鳥

名前は解らない

とにかくその黒く大きな鳥に

白に夢中になり

その存在に気付かなかった自分
はかわす暇なく食べられてしまう

…

…

そんな夢

「怖かった…今は怖かったぞおお!!!!!!

……………

フリーザじゃあるまいし…
でもちよつと怖かったかな

今の夢

毎朝恒例の一人コントも無事幕を降ろし
いつもど通りの朝が始まる

午前10時過ぎ

少し寝過ぎか

つと 電話電話

一人呟く

いつも一人の彼だが
別に友達も彼女もいないわけではない
友達はそれなりにいるし今年21歳を迎える彼女もいたりする

深空 圭

現在28歳

身長178

体重は秘密だそうだ

…乙女かよ

余談だが彼は誰にも（彼女にすらも）体重を伏せているそうだ
理由は言えないらしい…

小さなアパートを借り

そこで今時流行らないであろう探偵事務所をやっている

依頼はそれなりにあるらしく
なんとか不自由なく生活している

そんな彼は今

警視庁のお偉い方からの直々の依頼を
こともあるつか断る為の電話をかけている

「…あどうも深空です…三木さんに…はい…あつ三木さん…
こないだの…」

長くなりそうなので割合

電話を切る

「ふう…まああれはしゃあない
人生諦めが肝心」

「こないだまで『諦めたらそこで試合終了ですよ』とか言っ
つたか？」

「あれはあれ

これはこれ

あの時は気持ち的に

何故そこにいる」

「なんだその流れ」

「こないだお前『ここには当分来ない』みたいな事言っ
てたじゃねえか」

「あれはあれ

これはこれ

だろ？」

「それは俺専用

つか本当にどうした

土産でも持ってきたのか？」

「まあそんなところだ

…こないだからお前が調べてた事件

目撃者が見つかった

ここから一番近い駅から歩いて15分ほどの公園の便所で泥酔した
酔っぱらいが入り口がわからなくなり

裏に回った時…」

「あゝ あれな

ついさつき警視庁に断りの電話くれたばかりなんだ

残念ながらその土産は俺の口に合わない

つか三木さんそんなこと言っ
てなかったぞ」

「その酔っぱらいはお前もよく知
ってる奴だよ

直接俺のところに来た」

「奴かw」

「wとか付けるな

続けても良いか？」

「もう好きにしるよ」

「奴いわく犯人は真っ白なコートに真っ白なブーツを履いた肩口までのショートカットの女…で、血だらけだったそうだ」

言うと同時に彼はファイルを取りだし深空に渡す

「……………ああ？」

「去り際しか見ておらず顔は確認していないそうだが
奴が言うには『間違いない』

「もおいしいもおいしい

その先に言いたいことは分かっている

…それは俺が調べる」

「酔っぱらいの言うことを信じるのか？」

「いくら酔ってても奴はプロだ

見間違いないなんてするようならとつくに

「お払い箱か？」

「それは言い過ぎだけどな

まあ縁は切らしてもらおうと思う」

「…それは一緒なんじゃないか？」

「とにかく本当かどうか解らないから調べるんだろ
良い土産を有り難う

桐緒」

「いつもどおり《きりたん》って呼べよ

なんか…恥ずかしいじゃないか」

「…《きりたん》は恥ずかしくないのか？」

それにそんな呼び方をした覚えはない」

「それは残念

…とにかく

また飛びつきりの土産を用意して持ってくる

それじゃあ」

「楽しみにして待ってるよ

きりたん」

ははっ じゃあなけいたん

そう言い残しきりたん…

桐緒 文哉は部屋を出ていった

たく…きりたんて…いつの話だよ…

「よいしょっ…と早速出掛けるか」

深空は先程受け取ったファイルを片手に2分前に桐緒が出ていった
玄関に向かって足を進めた

真夏にコートとブーツ…

それも真っ白な…か

時季は積乱雲が空を覆い尽くす8月

「なんでお前がんな物騒なとこ居んだよ…」

懲りることなく一人呟き彼は車に乗り込む

第三話（前書き）

元タイトルが浮かばないorz

やっとタイトルが浮かびました

思っていたより早いペースで更新してます

ついに三木さん登場

どんな活躍をするのか…

もちろん僕にも分かりません

ではごゆっくりどうぞ

第三話

気が付くと午後9時半過ぎ

軽自動車車内

人通りの少ない林道脇

桐緒から受け取ったファイルを眺めているうちに眠ってしまったらしい

「寝てんじゃねえよ俺

…

寝てんじゃねえよ俺」

二度言う

「確認を急がなきゃなんねえのに…
どうしてお前が…

ふう…部屋を出る前に電話してみればよかったな…
急いでて忘れてた…」

ちなみに彼…深空は携帯電話を持っていない

依頼はすべて事務所の固定電話にくるし

不在の場合は留守電にメッセージをいれてもらっている

その固定電話もディスプレイが壊れていて、番号が表示されない上に履歴が確認出来ない

だが買い換える気はないらしい…

「今度買つか…携帯」

再び目的の駅近くの公園に向かい車を走らせる

（事件を知るにはまず現場から…だよな）

さすがに現場が公園なら公になるのも早い
こんな時間にも関わらず辺りにはちらほらと人だかりが出来ている
警察も一般人が入れないようにバリケードを張って何人かが今も調
査を続けている様だ

事件は8月

桐緒が深空宅を訪ねる前日の午前2時頃

場所は前途した通り駅付近の公園の公衆便所裏

これまたぐちゃぐちゃ殺人…

被害者は一般人男性のようだ

（便所裏って事は…

…奴以外に便所の入り口が分からなくなる人間がいるってことか…
きつと用をたしているときに標的にされたんだろっな

…真っ白なコートに真っ白なブーツを履いたショートカットの女…
に）

と深空がファイルを読み返していたその時

今いる場所から距離はあるが視認出来る位置にある住宅街
その小路に消えていく

街頭の灯りに照された純白の影

「……………!!」

……………みつけた…

まだここにいたのか…

千尋…!!」

「この事件はお手上げなんじゃなかったのか？」

「うおうつ!!」

…なんで俺の回りにはこう忍者ばっか…」

「はは…忍者か

たまたま現場に来たら君の車を見つけてね

ここにいてるってことは

まだ調べてるんだろ？

今回の事件を」

ブオオンツッ

「うおつと」

「話はあとだつ!!三木さんっ!!」

警視庁特別捜査隊指令

三木の話の後回しにし

深空は猛スピードで車を出す

「なんだなんだっ

いったいどうしたっ？」

「この事件の犯人…血色に染まった殺人鬼が分かるかも知れない…」

「なんだと…！」

「どうやってあんなにくちゃくちゃにしたかまではわからないが…
それは本人に聞けば解る…！」

深空と三木

二人を乗せた軽自動車がかましいエンジン音と共に
人通りの無い数年前に廃れた夜の住宅街へ吸い込まれていく

第三話（後書き）

タイトル決まっ
てよかった
た…

第四話

「今回も無かったそうだ」

「凶器と証拠と目撃者ですか？」

「おっ

よく分かっているじゃないか

さすが腕利き名探偵」

「よして下さいよ」

（ほんとはいるんだけどな

目撃者）

「で

君がまた捜査を始めたのは

今回の犯人と関係があるのか？」

「

まあちよつと」

「知り合いか？」

「

まあちよつと」

「親しい仲なのか？」

「

まあちよつと

は無しだ」

質問攻めの深空は返事に困りながらあることに気付いた

「妙だな…」

「どうした？」

「俺はさっきこの廃れた住宅街の小路にそいつが入っていくのを見たんです

大分探しているのに見つからない…

感づかれたかな」

「まあ出入り口は限られてるしな
妙っちゃ妙だな」

「エンジン音かな
でも車くらい…！」

…いた…！」

この廃れた住宅街の奥の奥
深空は

かつてはここに住んでいた子供たちが丁度今の季節
蝉とりでもしてたであろう裏山を見つけた
その街頭も無い真っ暗な山道の入り口に

真っ白なコートに身を包み

真っ白なブーツで足を覆った

ショートカットの女が二人を待ち伏せしていたかの様に立っていた

「女だったのか…」

…！」

中に入っていくぞ！」

「分かってます！」

絶対に…逃がさない…！」

険しい砂利道で二人は
純白を目印に女を追う

「…っ…！」

こっちは車なのに

なんで追い付けねえんだ！？

どういう事だよ！

スピードを全開にします！
しっかりと掴まっててくださいよ！」

猛スピードの軽自動車突き放すように
その白は二人から距離を離していく

「くそっ

しゃあない……

三木さん！拳銃……ありますよね！？
足元を狙います！

威嚇射撃を……

三木さん！

三木さん聞いてますか！！

三木……

深空の隣で三木は

猛スピードの車の中

シートベルトをしてないために

頭をぶつけんばかりに

前後に大きく揺れていた

しかし頭を打つことは二度と無いだろう

隣で暴れるように……

踊るように揺れる三木は

首から上が無くなっていた

「……………はい？」

三木さん……首……

忘れて来てますよ…
ちよつと…シート汚さないでく…くだ…ください…よ
返事をしてくださいよ
聞こえないっすよ…
死んでんじゃ…ねえよ…」

ひどく滑稽だ

車内は吹き出る血液で紅く染まり
立ち込める血液の臭いが胃の中を押し上げる
そんな中無くなった首などどうでもいいと言わんばかりに踊り続け
る首無しの死体

今まで生きてきた中でこんな…
こんな可笑しな状況に遭遇した事なんて合ったか？
ねえよ
なら笑うしかねえだろ？

「！！！！！！？」

彼を現実に戻したのは
フロントガラス一杯に映る一本の太木

「う…うおおお！！！！」
ぐしゃあ…と派手な音が無音の山になり響く

「ぐつ…ハンドル…間に合ったか…つあ…痛ってえ…」
車と…

三木さんの体は潰れちゃった…

俺は…

足は…動く…

腕も…なんとか動く…
前だつて…くそつ…左目は駄目か…ガラスの破片が…でも右目は見える…
まだ…やれる…
あいつに…
あいつに聞かなきゃならない…
なんでこんな…

こんな季節にコート着てるやつなんて一人しかいない…
調べるまでもなく
疑う余地もなく
ただ一人

「私はあなたを殺すつもりだったんだけど…
わたしだったら…困り者ね…」

「!!!!!!?」

「要らないわ…

こんなもの…」

純白はその足下にあつた汚いボールの様な物…

三木の頭を深空に向かい
蹴り飛ばした

深空はそれを抱え込む

「三木さん…

…千尋おおお!!!」

「千尋?

私は千尋なんて名前じゃないわ
いいかしら？
終わりにしましょ？」

突然

深空の腕の中で

三木の頭が

弾けて

飛んだ

飛び散った肉辺を全身に浴びながら深空は目の前の純白に語りかける

「さつきから一体…

…なんだってんだよ！

…その力で…

皆殺したのか…!!」

「聞いてどうするの？

…いい加減お開きにしましょ

バイバイ」

「!!!!!!」

千ひ

…
…
…
…
…
あの時の

あの時の夢は

夢だけど

夢じゃなかった

ってか？

…
笑えねえよ…

「今日はコートが汚れないようにこないだより少し離れて殺したの
だけど…」
つうー

「…
それでも…また…」

わたしが泣いている…

私は…悲しくなんて無いのに

私は…わたしの涙の理由も

私が人を殺す理由も解らない

第五話（前書き）

ほんとは第四話の後ろにくっついてた話だったんですが
完成後データが消えてしまったので一度に修復仕切れず
二つに分けて掲載しました

登場キャラの読み方は

高海 たかみ

悠 はるか

です

こんな駄作を読んでいただいている方には
僕から愛をプレゼントします

あ

いらない…

そうですか

…繰り返しますが

最後まで読んでいただければ幸いです

第五話

「ねえねえ高海は聞いた？」

あそこの住宅街の裏山で人が死んでたつてー」

「ふーん」

「ふーんつて死人が出たんだよ!？」

しかもグチャグチャ」

「その手の話は興味ないのっ

てかなんてごはん中にそんな話できるかなあ

今度たらこスパ作ったとき脳味噌の話しちゃうよ？

いいの？」

「……………??？」

「……………もういいっ

食べたら自分でさげてね

お皿」

「えーひっでえー」

「いや毎日そうじゃん

今日だけじゃないじゃん」

「あゝそうでした

あっ

昨日どっか出掛けてた？

わかった

彼氏んとこでしょ」

「いや出掛けないし

彼氏は最近あつてないし

…なんで思い出さなんだよ」

「口わつるー

こええー」

言いながら悠ほのかは自分の分の皿を下げ始めた

「元気かなー」

圭くん…」

「さっき言った事件の被害者だったりして…」

「これから一週間一人分しかごはん作らないから」

「なぬつてめつこるあ」

二人はルームシェア…

いわゆる共同生活をしていて

二人で短大時代に貯めたお金で2DKの部屋を借りて暮らしている

高海と悠

中学から一緒らしい

そんな二人

「バイト行ってくる」

「あたしは今日は休みだー」

「ゴロゴロしてなさい」

「そつするー」

てかテレビかおーぜ」

言いながら悠は食器を片しはじめる

そんな普通の一日が過ぎていく

『昨夜12時頃

…駅付近の住宅街で

二人の遺体が発見された事件で…』

64インチの薄型のモニターに
最近プロ野球選手と結婚したばかりの若いアナウンサーが
先日あった事件を報道している

「……………」

圭……………」

桐緒は昨日会ったばかりの男の顔が
何故テレビのモニターに映っているのかがしばらく理解できなかつ
た

第五話（後書き）

最後までちょっと後で修正するかも

第六話（前書き）

気が付いたら

毎日更新してました

その内1ヶ月に一回とかになると思います

…

いやー応…ね？

最終話まで書き抜くので

どうか最後まで

最期までお付き合いして戴けるように頑張ります

ではじゅるりとびんごぞ

第六話

「気持ち悪くなってきた…」

悠がご飯中に

あんな話するからだよ…

休んじゃおっかな

…バイト」

高海はそう呟く

「土曜は混むしなあ

あゝやだやだクリーニング屋さんなんて」

嫌々言いながら高海は

バイト先のクリーニング屋に向かい自転車を漕ぐ

（バイト終わったら

ちよつと圭くんとこ行ってみようかな

遠いけど

…別に悠が言ったことを

気にしてる訳じゃないんだからねっ！！

…

…

ツンデレってみてもいいかな)

そんな彼女は深空の恋人…

だった

今はもう深空はいない

(っしゅ
気合い入れてこ)

「ミイラ取りが
つて奴か…」

…白コートの女
名前を知っているのは
深空だけ…

住所も電話の番号も

深空しか…

奴…

氏原は会ったことあるんだっけか…
俺は見たことすら無いけど…」

モニターの前で

桐緒は頭を抱えていた

深空に渡したファイルは

現場の詳細ばかりで

犯人の手掛かりについては

白コート

白ブーツ

ショートカット

と言う事くらいしか載っていない
「氏原は電話持って無いからな…」

連絡の取りようが無いな…

奴が白コートの女を目撃して

家に飛び込んで来た後

『やべえって！』

俺も殺されるって！

俺…

逃げっ！！』

とか言つて

どこかに逃げ出したしな…

…

今や残つたのは俺一人…か』

…

…ふうっ

桐緒は深く溜め息を吐いた

…

「手詰まりじゃねえかよ…

…

あ

…

そうか…

深空の部屋を調べれば

何か出てくるかもな…

どうせ鍵は閉めて無いだろうし

ここで考えてるだけよりはマシだろ…」

そう言つて桐緒は荷物をまとめ

部屋を後にした

午後9時

辺りは昼に比べると
人が消え失せたかのように
静まり返っている

「やっと終わった…」

もう疲れたよ…

圭くんち行く体力なんて

残って無い…

残念だけど今度にしようか…」

そう呟く高海の横を

高級そうな車が

風を切るように抜けていった

「うわ

わたし左ハンドルって初めて見たよ
ん？

て言うか今の人…

どっかで見たことあるような…

…

いやないか

この町にお父さん以外に

あんなお金持ちそうな人

いないもんね」

高海の父親は中々の金持ち

だったらしく

余談だが孤児だった悠を引き取り

短大卒業までの資金を
出したのも

高海の父親である
決して深空は逆玉を
狙っていた訳では無い
と付け加えておこう

2年前に高海の父親は
事故で死んでいる
財産は全て陰謀によって
母方の親戚のものになってしまい
高海たち親子には一銭も残らず
母親に負担を掛けまいと
家を飛び出した二人は
短大卒業後フリーターをしながら生活している

「お父さん…

…今のわたしには

感傷に浸る元気も無いよ…

ごめんね

お父さん

お母さん

腹を空かして待っているであろう悠の為に
高海は家路を急ぐ

「あれ？

深空の彼女って

あんな娘じゃなかったっか？

…

くそっ

大分通り過ぎた…

もう見つけれ無いか…

まあいい

深空の部屋に行けば

番号くらい分かるだろ」

ドルウウツ

(この林道を過ぎたら

あのアパートまであと少しだ)

桐緒の車が

深空の住んでいた

アパートに辿り着くまでに

十分程の時間も必要無かった

第六話（後書き）

誤字脱字

不自然な語尾等がありましたら

お手数ですが

感想欄に一言お願いします

いやマジで

第七話（前書き）

すごい短いですが

これでまた話が動き出します

まあ

続きはあまり考えて無いですけども！

ヨホホホホホ！！！！！！

…こほんっ

ではじゅっくり

第七話

「なあんてこおったあい」

自称若本のマブダチである桐緒は

目一杯の悔しさを

山川商事の出っ歯

いや脱獄者の相棒の様に

はたまた怪力少女の保護者よろしく

鬼面の童子節に乗せて

これ以上無いほどに表現していた

深空の部屋にあつた

ディスプレイの破損した電話機

こんなモノじゃ深空の恋人の

電話番号なんて分かりやしない

「電話機にここまでがっかりさせられたのは

この世に性を…生を受けてから初めてだ…」

ずばらな深空の事だ

メモなんて残してないだろう

（ずっとあいつから

電話が一本も来ないのは

こついう事が…

確かにこれじゃ番号が解らない

特別捜査隊に断りの電話をしたときは…

リダイヤルを上手く活用したのか…)

だとしたらリダイヤルキーを押しても
深空の恋人には繋がらないだろう

そう判断し桐緒は

深空彼女へのコンタクトを
諦めた

無駄だと思うが

あいつのパソコンに

情報は無いか

そう思い立ち

深空の部屋に届き2年が経つ

『ほぼ新品』のパソコンに足を運ぶ

(使えよ…パソコン…)

折角買ってやったのに…

…

ん?)

モニターの横に

ガラスに縁取られた

一枚の写真

三人の人間が写っている

深空

高海

そして悠

(真ん中の娘は…)

やっぱりさっきの娘が深空の彼女だったか…

……彼女には

聞かなきゃならないことが

山ほどある…

…！

日付は去年の夏…

奴が言っていたのはこういう事か…

確かにこれなら…

……思わぬ手掛かりだが

これはチャンスだ…

明日……さっきの通りで待ち伏せるのが確実かな……)

第七話（後書き）

絵では表現できない文字

文字では表現できない絵

表現力を養うためには

どっちも僕にとっては重要な
参考書です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0028h/>

私はわたしのために

2010年12月24日14時11分発行